

# 日本記者クラブ会報

## 国公賓の来日相次ぐ

### クラブゲストに折衝中

今秋には国、公賓の来日が相次いで予定されている。まず九月中旬にはアイルランド大統領、十月下旬にはノルウェー国王、十月下旬から十一月はじめにかけてコール西独首相、そして十一月にはレーガン米大統領、胡耀邦中国共産党総書記などである。

これら要人の来日中の日程については、まだ最終的に決定していないものもあるが、すでに先遣隊が来日して、詳細な打ち合わせをすましたところもある。当クラブとしては、来日する国、公賓が内外の報道機関を通じて、広く日本国民ならびに海外向けにメッセージを送るのにもっともふさわしい場であるところから、

外務省や関係国大使館などと緊密な連絡をとりながら、日本記者クラブでの記者会見が日程のなかに組みこまれるよう、鋭意折衝中である。

八月は、いつもの年なら夏枯れでクラブにとってもひまな月だが、本年は事務局も秋の相次ぐ要人来訪の準備に追われたほか、二日にはシュリーター・デンマーク首相の記者会見、五日には一昨年七月から回を重ねて二十回になるシリーズ研究会「新技術」の締めくくりとして、江崎玲於奈氏を招いての講演会が開かれた。また今年度から始まった「ソ連」「軍事技術」「減税問題」「世界経済の課題」の四つの新シリーズ研究会のうち、二十五日には「減税問題」

第163号  
1983年  
9月10日発行  
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一  
プレスセンタービル9F 電話100  
◎ 社団法人 日本記者クラブ  
電話五〇三二七二二(代)

で青木茂新参議院議員と、三十一日には「世界経済の課題」で経済企画庁の前海外調査課長田中章介氏を招いてそれぞれ研究会が開かれた。

同じ三十一日にはフルグラ・スイス経済大臣、九月にはいって五日にはハートリング国連難民高等弁務官の記者会見が開催されたほか、八月二十四日の試写会「はだしのゲン」も好評であった。

### 取材証の更改を

今月は「日本記者クラブ取材証」の三年に一度の更改時期にあたる。

この取材証は、報道関係の法人会員社に対して、基本会員の人数と同数発給されており、当クラブの会員として登録されていない人でも、この取材証があればクラブ主催の昼食会、記者会見、研究会に参加できることになっている。

取材証の管理は各報道関係法人会

員社に委ねられているが、要人を招いて記者会見が行われる場合には必ず警備上の問題が伴うので、クラブでは三年ごとにこの証を更改して万全を期している。したがって本年十月からは、これまでの取材証（ブルー）は無効となり、あらたに発給される取材証（ピンク）でなければ取材できなくなる。

### 委員長に水上氏

会員資格委員会

昭和五十五年十月以来会員資格委員会の委員長を務めていた加藤祥二氏（読売）が六月、当クラブ理事を退任したため、新井理事長は八月の書面による理事会の議を経て、あらたに読売新聞社常務取締役編集局長水上健也氏を同委員長に委嘱した。

### 九月一日現在の会員状況

法人会員	一四四社
基本会員	六二九人
個人会員	一、〇八一
法人・個人賛助会員	五八社 一七五人
特別賛助会員	七三人
名誉会員	一二人
計	二〇二社 一、九七〇人



とっておきの話

## 池田・ドッジ・シャウプ時代

中 川

順

「あのお父ちゃんの時代が懐しいなあー」

日本記者クラブの昼食会のゲストに招かれた大平首相が、感慨深げに隣席の私に話しかけた。

## 一本気だった池田さん

戦後、サラリーマンから記者稼業に転向した私が、かけ出し時代に悪戦苦闘したのが大蔵省。池田蔵相、大平、宮沢両秘書官がトリオを組んでいた時であった。敗戦からインフレ収拾、復興へと苦吟した池田・ドッジ・シャウプ時代、記者商売冥利に尽きるわけで、狂瀾怒涛、寝食を忘れた四谷の数年間は懐しい限りである。

ドッジ、シャウプに明け暮れた占領政策の取材は、率直に言って、新米記者には重荷であり、池田蔵相が

「英雄」にみえたものである。吉田ワシマン首相の全幅の信頼を得てドッジ交渉に当たり、至上命令というべき「経済九原則」（超均衡予算の編成など）によって政策決定権を握っていた池田蔵相は、当時オールマイティ的存在でもあった。事実、大臣の直接取材以外に記事にはならなかったものである。

「中小企業倒産やむなし」「貧乏人は麦を食え」というかの有名な「放言」が飛び出したのも、彼の自信過剰と気負いがモトである。

中小企業放言の発端となったのは、われわれ大蔵省クラブ（財研）

の記者会見が原点である。「生意気な池田」攻撃の共同謀議だとする見方があるが、生まれるべくして生まれたと言うのが真相である。

当時、ドッジラインによるデフレの進行で三月危機が叫ばれていた際でもあり、このへんで実力者池田蔵相の考え方を、洗いざらい質しておこうという記者団のねらいであった。

会見は昭和二十五年三月一日、参院第十二委員室、雪の降る日であった。池田さんはブチまわった。宮沢秘書官のブレイキも効かず、記者団のなかから何回も念を押す場面もあったのだが、池田さんの舌鋒は加速する一方で、あの放言となったのである。後年、昭和二十七年十一月二十七日の衆院本会議で、この言質をタテにとられて、通産大臣を棒に振るハメになった際も、質問者の加藤勘十氏（社）が再質問で念押ししたに

もかかわらず「中小企業者が倒産から思いあまって自殺するようなことがあって、お気の毒でございませうが、やむを得ないことは、はつきり申し上げます」（速記録）と言いつつ経緯も同じである。やけにムキになる一本気のところが池田さんにはあった。

後年、大平正芳氏が自民党総裁選に勝った日が奇しくも池田不信任可決と同じ日、「おやじさんが助けにきてくれたのかなあ」と大平氏は語っていたが、とにかくドッジ時代の池田さんは飛ぶ鳥を落とす勢いで、これがいろいろトラブルを起すことになるのである。

## 寝台車での酒盛り

昭和二十五年四月、吉田首相から講和条約締結の打診という密命もおびて、池田蔵相は渡米、現地でドッジ氏と折衝し、デフレ政策の緩和を要請した。ドッジラインの強行から失業、倒産が続出して経済危機の様相を濃くし、国民生活の安定確保のためには減税、公





なかがわ すなお氏略歴 大正八年広島県生まれ。慶応義塾大学経済学部卒。三菱電機株式に入社、昭和二十一年日本経済新聞社に転じ経済部勤務。三十四年経済部長、四十年編集局長、取締役・主幹を経て四十五年常務取締役・電波担当、五十年東京12チャンネル(現 テレビ東京)社長、現在に至る。  
日本経済新聞社参事、民放連理事、郵政審議会会長代理などを務める。

務員給与の引き上げが必要だと訴えた。ドッジ政策の転換が認められるはずはなかったが、折衝内容はドッジからマッカーサー元帥宛の書簡となるなどの成果を生んだ反面、GHQ首脳を強く刺激し「交渉ルートはあくまで司令部なり」というお墨付きを突きつけられる結果になったのである。

池田蔵相はあの日(昭和二十五年五月二十二日)払曉の四時四十五分羽田着帰国、ただちに九時東京駅発「つばめ」で京都に向かった。遊説で京都に滞在中の吉田首相に報告するためである。私も羽田から京都へ同行して、吉田、池田会談が行われた吉福旅館にもく

り込み、両者が会談した二階座敷の場面を目のあたりにし、側近取材で戦果をあげた。

帰国早々、GHQの険悪な空気を知らされていた池田蔵相は、首相に報告するや同夜トンボ返りで帰京することになった。私もこれに同行した。一等寝台車の一室のカーテンのなかで、池田さんは党の益谷秀次総務会長と差して酒盛り中だった。警戒厳重のなかをくぐり抜け、トップの夜の牙城に入れて愉快だった。

池田さんはかなり酔っていたが、私を見るなり「一杯やれよ。一緒にやろうや」とご気嫌だった。重箱にギッシリ詰められた美味はいまでも彷彿とする。単刀直入に渡米土産を質したところ、益谷氏が「そう簡単に言えるかい。池田はいまやわが党の、いや日本の千両役者となった。われわれは池田を大事に大事にこれから使うつもりだ。ねえ、池田君？」とさえぎる。

取材の方は歯が立たなかったが、時の「千両役者」と深夜の寝台車の一室で二時間も痛飲談笑できたことは思い出である。

池田蔵相は帰京の翌々日、GHQにマーカット経済科学局長を訪ねたが会えず、「玄関払い」を食った。吉田首相も急拠大磯に帰り、マ元帥を訪ね釈明しようとしたが、これも不発に終わり、与党内でも吉田、池田直結方式に不満が噴き出し、池田辞職論、追放論も出る有様であった。「自信に満ちて凱旋將軍のように帰ってきた池田氏がすっかりおれていながらも、強気を粧っている有様は気の毒であった」と対占領軍交渉秘話・渡辺武日記にもある。

#### 勸進帳事件

もうひとつ勸進帳事件というのがある。戦後日本の税制改革に大ナタをふるったシャウプ博士の来日中の話。交渉も大詰めに近づいたある日、シャウプ氏が軽井沢に週末静養に出かけた。われわれ大蔵省記者団は、すわ池田折衝が、と色めき立って、記者会見でしつこく念を押すと「天地神明に誓って軽井沢には行かない」と断言する。「私はウソを申しません」の池田さんが言うのだから

と信用したのが大失敗、池田・シャウプの軽井沢会談で税制改正が決まったのである。記者団は怒りに怒り、池田蔵相に対し抗議文を突きつけ、「非民主的態度」を糾弾した。幹事が読みあげる勸進帳を池田さんは頭を垂れ、神妙に聞いていた。後年、首相になった池田さんは、私邸の茶の間で茶ダンスからこの古ぼけた抗議文をとり出し、「これはいい薬になった。ずうっと大事にしているよ」と語っていた。深夜のことである。

昭和三十八年、私が米國務省の招待で渡米した際、デトロイトでドッジ氏と親しく会う機会があった。氏は池田首相の高度成長政策に批判的で「どうも政治家というものは、調子に乗り過ぎるのが悪いくセだ」と、一般論だと断りながらも、苦り切って語っていた。

いまや百兆円の赤字公債の財政危機。超均衡財政時代を回想し、往事茫々、それにしても、池田さんは一本気で時代を生き抜きたい人だった。大平さん同様、私もあのころが懐しい。



## 原水禁'83世界大会

ワーキングプレス

酷暑の中で繰り広げられた今夏の原水爆禁止'83年世界大会は八月九日、長崎市で開かれたメイン大会で日程を終えた。大会関係者はホッと一息ついているが、大会の評価については慎重な構えをみせている。というのも、歴史ある日本の反核・平和運動が、緊迫する核情勢の下で、世界の運動の手本になる具体的行動を海外から求められているからだ。大会限りでない力量を試され、日本の反核・平和の運動は一つの転機を迎えたといっても過言ではない。

酷暑の中で繰り広げられた今夏の原水爆禁止'83年世界大会は八月九日、長崎市で開かれたメイン大会で日程を終えた。大会関係者はホッと一息ついているが、大会の評価については慎重な構えをみせている。というのも、歴史ある日本の反核・平和運動が、緊迫する核情勢の下で、世界の運動の手本になる具体的行動を海外から求められているからだ。大会限りでない力量を試され、日本の反核・平和の運動は一つの転機を迎えたといっても過言ではない。

## 転機迎えた日本の反核運動

河野 一郎

(中国新聞社 東京文芸編集部)

「彼らは自分の意思で命を賭けている。誘われて長崎まで足を延ばした日本の参加者とは意欲が違う」と、大会の有力メンバーの一人は、カブトを脱ぐ。そして、秋から冬にかけて、海外から求められた具体的な反核行動に対する回答に戸惑いさえみせる。

しかし、振り返れば日本の運動こそが一人一人意志強固に行動する運動ではなかったか。世界で最初の被爆国として被爆者の体験を、わが心に刻みつけた一人一人の行動に裏打ちされた運動だったからこそ、日本での原水禁世界大会が常識になっているのである。だからこそ、今年の海外代表の注目がよけい気になる。

海外代表にとってみれば、ごく当たり前と思える広島原爆慰霊碑前の核実験抗議座り込み。その機会が大い期間中にもあったが、広島入りしていた中央の大会関係者の姿はごくわずか。大会前には、準備委の会合の招集に際して、被爆者団体の代表である日本被団協に連絡漏れになる



国際会議であいさつする森滝市郎広島大学名誉教授  
(写真提供・中国新聞)

ケースさえあった。広島、長崎の被爆地では不信感が漂い始めている。「草の根」という言葉の求心力も万能ではない、との冷徹な見方さえ現れているのも事実だ。

「今や大国間の核交渉では問題は解決できない。草の根の力で核保有国に迫るべきだ」——崇高なイメージを運動の看板にデッサンする国内の団体のリーダーたち。だが、正念場を迎え、何はともあれ、今一度運動の原点である広島、長崎の被爆の実相を胸にたたき込む必要がある——大会取材を終え、そんな気がしてならない。



# 夏の甲子園

## ワーキングプレス

Aアナの顔から血の気が失せて身体が小ささみにふるえ出した。もう限界。我慢の限りを越えた勝脱は、あわれ風船玉と化してもうはち切れそう。忍の糸が切れそうなのである……。

甲子園の高校野球中継は、全国各地に勤務する若いスポーツ・アナにとっての登竜門である。球児達の檜舞台は、それを伝えるアナウンサーにもまた夢の晴舞台となるのである。だから一度選ばれ、この舞台上に登場した者、如何なる理由があっても倒れるわけにはいかない。

全身鳥肌立ったAアナは思考力の薄れていく中で先輩の教え通り、死んでもラップを放しはしないと己に誓い襲い来る欲求の嵐と必死に闘っていた。

この苦しみだけは体験者でないと理解してもらえない。交替を許されないアナウンサーにとって尿意は大敵なのだ。

その日試合前の取材をすませ、いざ甲子園と初登場のAアナ、戒めに従って朝から好きなコーヒーマットより、ほとんどの水分を断って放送にのぞんだのだが、余りの緊張と暑さにつ

い禁を犯して咽の渴きをいやしてしまっ。落ち着け落ち着け、ゴクリゴクリとやってしまった。試合は一進一退のまま前半を終了、さあこれからますます白熱のゲームとアナウンスにも力のこもる頃から、新鋭Aアナ思いのほかに尿意を感じるようになっていた。

(しまった！ 朝の味噌汁だってさけるべきだったのだ)。タンクの貯水量が試合の経過を示すスコアボードとともにふえていくようだ。

### あっボールがランナーに

羽佐間 正雄

(日本放送協会 アナウンス室)

ラッキーセブン、あと三回だ、なんとか頑張るぞ、己に言い聞かせながらしゃべり続けた。しゃべりながらしかし尿意は次第にエスカレート、我慢の行進が始まる。アナウンスにミスが目立ちはじめた。だが戦の神は意地悪だ、必死の思いのAアナを見すてるのか、八回、試合は同点になってしまった。

ああ、なんたること、このままでは延長になるじゃないか、どうしよう、どうしよう。はりさけそうな下腹を抑えながら彼は祈った。終わって早く終わって！

お願いです。終わってください！……。CMタイムがない放送局に入ったことをこれほど恨んだことはなかった。

ディレクターが走った。放送席から最も近いところにある阪神タイガース選手用のトイレをなんとか開けてもらうために走った。高校野球期間中、このトイレはどういうわけかクローズになってしまふのだ(猛虎よ、冷たいじゃないか)。その頃Aアナは、最後の起爆装置に点火されたら、もう恥も外聞もなく座ったまま放水する決意を固めていた。

九回裏、同点。延長濃厚、いよいよ放水試験にうつる

以外にないとAアナが決断した時、ランナー二塁、打った、ショートゴロ、ショートとった、ランナー三塁へ。ボールを送った、タッチアウト！言おうとした瞬間である。ああ！ボールがランナーに当たった！ファウルグラウンドに転々、ランナー三塁を回った、ホームイン、ホームイン、試合終了、サヨナラゲーム！

「救いの神！ 救いの神！」……これは心の中の放送である。

勝利監督インタビュアーアナに少し長目に聞いてくれと連絡が届いた。Aアナはダッシュした。トイレに向かってダッシュした。たまりにたまったものを一気に

放出！と思ったが、どっこい意地悪の神はまだ生きていた。出ない出ない、あせるほどに出ないのだ。早く戻らねばインタビュアーが終わる。さほど長いホースでもないのに……。Aアナはそのホースの存在を全く無用のものと感じていた。



今年の夏もAアナの声が甲子園から電波にのっていた。聞く人が知りようもない水断ちのAアナの声である。あの我慢の限界にのぞんだAアナ、その後玉のような双生児の父親となった。あの苦しみと我慢の産物であろうか。



写真はAアナではなく羽佐間アナウンサーです

(写真提供・NHK)



●一九八三年七月十二日 ●

## INSに向けての道

真藤 恒

(日本電信電話公社総裁)

この頃、電々の記事がいろいろと出ていますので、たまに中学校や高等学校の友達に会って「ご無沙汰ばかりしまして」とあいさつすると、「いや、新聞でよくお目にかかっているから」なんて皮肉をいわれまして、私がどうもマスコミにのり過ぎていているというよりものせられ過ぎていような気がします。

しかし、この頃はみなさんの電々に対する了解内容が、私どもにとっては——こんなこといったら失礼ですが——非常にグレードが高くなりました。私が就任した時に比べますと、いまは正しく報道していただいている。初めから何かの考えがあつての記事でなくて、ありのままに書いた記事がふえてきましたので、大変ありがたいと思っています。

ことに私どもは、これからINS（高度情報通信システム）の実現ということで、電気通信の内容を大きく変えざるを得ない。そういう面でも世間一般に、電々の仕事に関して従来以上に了解していただいております。うまい具合にいかない。経営形態の問題もこれからそろそろ本番になるといふ状態でもありますが、最近何かにつけて電々の記事が多く、しかもその

内容が非常に正確ですので、非常に幸いなことです。良し悪しは別として、日本ではただ一つの電気通信設備を管理している組織ですので、これが変な方向へ動き出すと大変なことになるし、またそれをやり直すのにも時間がかかる。その間に世の中に非常な迷惑をかけるということになりかねない。ですからそういう意味でも、今後ともこうした傾向の報道を続けていただきたいと思うわけです。

### アナログからデジタルへ

エレクトロニクスを中心とした技術の進歩が飛躍的な状態になってまいりまして、電気通信設備の使い方、あるいは電気通信設備としての性能が従来とまるで様変わりしてきています。最近の情報産業的な、あるいは情報社会的な世の中の要求にマッチ出来る性能が、次から次へと発案されています。いまの電気通信設備は電話と電報で、それにごく部分的にコンピュータのつかっているという状態ですが、これがこれから、私どもが希望しようとして大きく変質していく。それが情報化社会の進展に決定的な問題になりますので、その面でも私ども、非常に大事な仕事を引き受けていると考えているわけです。

これまでの電気通信設備はアナログタイプの電気通信設備です。電話をかけますと、声が振動板に伝わって、振動板の振動が通っていく電気の流れの強弱に影響を与えて、波型の電流が線の中を流れていく、向こうでまた振動板を動かして、耳に聞こえるようになるというものです。交換機も機械的な交換機が主になっている。

それがデジタル交換機に変わる。機械的な交換機が

電子計算機と同じメカニズムの交換機になります。デジタル化して交換機がそういうふうになると、それだけで一本の電話線の中を通っていく通信の量、いわゆる情報量が、アナログタイプに比べるとケタ違いに大きくなる。私どもがいまからやろうとしているのは、標準を六四キロビットとっていますが、一本の電話線の中に一秒間に六万四、〇〇〇個の信号が通せるといふものです。

これが出来ると、静止画像や電話やファックスが同時に使える性能になりますので、光ファイバーに変えなくても、電話局の交換機を六四キロビットのデジタル交換機に変えることにより、差し当たりINSの実用上の性能は出てくる。これには電話局の交換機だけを変えればいわけです、あまり費用もいらぬ。案外、早くINSが出来る可能性を持っているわけです。

しかし、一つ問題があります。デジタル交換機は電子計算機そのものですから、オペレーションやメンテナンスが、電子計算機のそれとまったく同じです。したがって、いま電話局にある交換機にくっついていて人たちの技術が全部役に立たなくなる。再教育しなければいけない。その人数だけでも十万人近い。いまそれを大騒ぎして始めているところですが、何とか使いものになる、という程度ではいけませんので、再教育して本当にエキスパートになってもらわないといけません。新しいものは故障が起こるとなかなか簡単に直らない。非常に直しにくい。技術的なレベルが個人だけではなくてチーム全体に行き渡らないと、うまい具合にいかない。ここが大きな悩みです。

しかし、これは何としても、私どもがやらなくては



ならない仕事です。いま全国に十何か所、デジタルの交換機を実際に置きまして、訓練を始めようとしています。東京にはすでに設備を置いて訓練を始めていますが、それでは間に合いませんので、大がかりにやるうとしています。そういうことで、何とか世の中の変化に間に合わせていこう、としているわけです。

### 光ファイバーへの敷き換え

次にデジタル交換機に光ファイバーを繋ぐということになりますと、これまた様子がガラッと変わってきます。一番性能のいい光ファイバーを使えば四〇〇メガビット/秒という信号量を送れることになら。四〇〇メガビットというのは、一秒間に四億の信号が一つの光ファイバーの中を通過していくわけで、こちらになりますと、何もかも、うんと出来て、出来過ぎるぐらいになる。一般の加入者のところへ引き込む光ファイバーは、そんなに性能のいいものでなくても、一〇〇メガくらいあればもう十分です。長距離幹線などには四〇〇メガを使って、出来るだけコストを下げたいんですけれども、将来、みなさんの家庭に入っていくのは、一〇〇メガ程度のもっと安いもので十分間に合う。一秒間に一億の信号量ですから、大概の要望には耐え得るわけです。

こうしたハイグレードのものについては、これを要求するお客のほうから提供し、だんだんINSを普及していくこうということなんです。現在の線を光ファイバーに敷き換えることになりまして、そういうことを要求するお客が地域別にどういうふうに出てくるのだろうかというの、これからの問題です。差し当たりは大企業に業務用として使っていたら、あるいは

特にマスコミの情報伝達、印刷関係で使用してもらう。あるいは生産のリモートコントロールに使う、ということから始まると思います。

現にそういう計画を具体的に考えられて、私どものほうに相談にくる会社が、このところ急速にふえてきました。それに対応するために、大口ユーザーの業務の高度情報通信網の設備およびその使い方について、いろいろ相談を受けながら、こちらも一緒に勉強させていただき、本格的な研究に入りかけているところです。

この七月にそういう方面の窓口として、新しい組織をつくり、本格的に取り組みを始めたわけです。思ったよりも早く業務用としてたくさん要求が始まっていますので、初め考えていたより実現が早くなるのではないかという気がしています。それならそれでこっちはもう、それに対応する準備をしなければならぬ。要員の技術的な訓練の問題もありますし、ファイナンスの段取りもしなければなりません。そういう意味でも、私どもは大きな質的な変革を要求されているわけです。

### 国際競争力に直結

この電気通信設備の変革は、日本だけが出来る特殊なことではありませんで、どの国でも出来るわけです。そうすると、電気通信設備の物理的な性能を変えていく速さと、それをもっとも有効に経済目的なり、政治目的なり、行政目的に使っていくシステム、いわゆるソフトの発展の仕方が、実は国際競争力の問題にも直結するわけです。

私ども今日まで国内の電信電話だけを受け持ってい

ましたので、国際競争ということは考えずにすんだわけです。しかし、今後は違う。情報化社会への転換というのを、国際競争的な面で見なければならぬ。下手なことをやって遅れたりすると、それだけ全体的な日本の社会の能率が、先進国に比べてガタンと落ちる。そんなことをしてかしたら大変なことになりますので、そのへんのことを私ども当事者として十分心得ながら、世の中の要求に即応する、即応するといふよりも、要求を先取りするという格好で、ちょうどほどの結果になるのではなからうか、と考えています。

時間的な問題ですが、いまの差し当たりの計画は、六二年になると全国の主な都市の交換機がデジタルに変わる。あと五年で大都会の主な電話局の交換機がデジタルに変わる。現在の線がかなり高度な使い方に耐え得る形になる。と同時に、その頃からポチポチいまよりもっと複雑化した使い方を、光ファイバーの専用線が出てくるのではないかと考えているわけです。

こうしたパラパラパラ出てくる光ファイバーの要求に対して、どういうふうな敷き換えていくか。パラパラ出てくるのだけをやっていたのでは、これまたおかしなことになるのですが、あまり先行投資をやって光ファイバーを入れ過ぎると、これまたおかしな現象になってきます。そのへんをどういうふうにやっていくのがよいのかが問題です。

ことにパラパラ出てくる、光ファイバーの性能を要求する地方のお客に対しては、実は無線で光ファイバーと同じ性能を出せるものが出来ましたので、しばらくはそれを使っていたらどうかと思っていま



す。  
では、光ファイバーに大体目鼻がつくの何年かかるのか。これは先のことので分かりませんけれど、お客さえつければ、いまから一〇年から一五年のあいだには、ほとんど変えていけるのではないかと考えています。

#### あと四、五年で整う準備

これに変えていく費用なんですけれども、時どきマスコミに違った書き方で書かれて少々困っているのですが、これにすっかり変えていくには二〇兆円から三〇兆円はあるだろうと思います。いまみたいに物価が落ち着いていけば、二〇兆円そこそこだろうと思いますが……。私も、毎年一兆六、七千億くらいは投資をしているのですが、五十八年度、五十九年度では約八千億円から一兆円近くを、INSへ変えていくための投資に振り向けています。したがって、かなりのスピードでそういう変革をやらなくてはならない、ということになって、私も赤字を出ささないければ、何とか世の中の要求についていけるだけの投資能力が維持出来るだろうと考えています。一時的には多少借り増しをしなくてはならないと思いますが、子どもの借り増しの能力の範囲内で十分やっていけると思っています。

また、そういうふうな新しい設備に必要な機械類は、日本のメーカーなり、外国のメーカーのもので十分間に合う姿になっているので、そちらの心配もまずない。

極端にいえば、世の中の要求次第すぐそれに応じて、いつでもそういうものを提供できるようにするの

が、私どもの義務なのですが、要求があればいつでもというふうにいえるまでには、主要な都市でもあと四、五年はかかるのではないかと思います。

業務用ということになれば、少々値段が高くても、そういうものを使うメリットのほうがケタ違いに大きくなる可能性がありますので、いまの料金レベルに準じた形で料金設定しても利用してもらえらると思うのです。しかし、これを個人生活レベルで使える段階にもっていくためには、そう簡単にはいかない。

#### 料金の体系とレベルが問題

ご存じのように、こういう通信の使い方は、電話と違ひまして、スイッチオンしている時間が非常に長い。子供の学習に使うにしても、娯楽に使うにしても、あるいはショッピングなりバンキングに個人として使うにしても、電話のように「はい、さようなら」というふうに簡単に用がすみません。スイッチオンしている時間が非常に長くなる、長くなると、いまの料金体系ではとんでもない料金を毎月払っていたかなくてはなりません。それではダメで、可処分所得の中に入れていなければならない。

それともう一つ大きな問題は、いまのように長距離料金と市内料金との差が大きくては、これまた長距離のINSの使用が事実上不可能になる。長距離で長時間使った場合でも、料金を可処分所得の中に入れ込んでいくということになりますと、極端にいいますと、可処分所得に入る範囲内の全国単一料金にしないで使えないものにはならない、ということになります。データバンクペースの使い方が、家庭用でも非常にふえてくると思うのです。データバンクというのは、

こういう社会ですから、どこの国でも大都市に集結するだろうと思います。そのデータバンクを使うのに、九州や北海道の方と東京都内の方が、同じような料金にならなくては社会的に意味がない。またそういう時代になると、電話と電話以外の電気通信を区別して違った料金体系にするということも、一つの線の中で非常に面倒臭いことになる。このへんの料金体系の問題と料金レベルの問題が一番難しい。

いまの公社制度の中では、この問題の解決はどう考えても不可能だと、私も部内の者は考えているわけです。経営形態を変えようということが、その面が必要になってくる。現在の姿で、電話と電報だけで、あとこういう新しいものが世の中に必要になってこないという前提なら、そう経営形態問題をシリアスな問題として考えなくてもいいといえますが、INSという方向へいかざるを得ないという現実からすれば、そうはいきません。使いたいものになるINSをつくるためには、どうしても三〇年間の歴史を持つ組織を根本的に変えていかなくては実現出来そうにない。技術的な要求の面からしても、あらゆる面から見ても、いまの公社制度という形の中では出来るかもしれないが、非常に長い時間がかかる。あるいはまず出来ないだろうというふうに、私どもは当事者として考えているわけです。

#### 質疑 応答

小笠原(朝日) 総裁はかねがね熱心な民営論者と承っていますが、それに対して、一部にはかなり反対もあるようです。特に自民党や郵政省などの中には、いまの電々公社を中央会社と東西の二つばかり



の地方会社に変えて、その中央会社を出資証券方式といいますが、日銀と同じような特殊法人にもっていくという案がありますが、この案に対して、率直に総裁はどう評価されているか。

もう一点、総裁はかねがねINSにしましても、あるいはもっと近いところではキャブテンシステムにしましても、電々はハードのほうはやるけれども、ソフトにはタッチしないということは何回もおっしゃっています。ただ、ソフトとハードと申しましても、境界線が難しいところも多々あるわけです。原則的にソフトにタッチしないということは、電々の本体ばかりではなくて、電々の出資比率の高い子会社についても同じようなことがいえるのかどうか。本体ではやらないけれども、子会社でどんだんやるというなら尻抜けですから、そこらへんはどういうふうに考えたらいいか。以上の二点をおたずねしたいと思います。

真藤 初めの質問ですが、いま私どもは、国家組織の中の一員として、いまの質問に素直に答えてはいけない立場に立っております。どういふことかといえますと、臨調の最終答申が五十七年の七月の末に出まして、行革大綱が本年の五月の末に出しております。行革大綱では、臨調の答申に沿って調整を進め次期国会に法案を提出すべく準備にかかれ、ということになっていきます。現在のところ、臨調の線に対して権威ある意見として、あそこはいかんからこうしなさい、という声はどこにも出ていません。ですから、私どもはいま、素直に行革大綱の線に沿って勉強する以外に、わが身の置く場所がない状態になっているわけです。

特に私どもは、国営ではあっても事業体でして、行政官庁ではありません。法案提出の準備をするのは、

郵政省が全責任を持ってやるべきことで、私どもが法案の起草に積極的に入り込むということもあり得ない。その過程で郵政省から当事者に対して質問があれば、それには十分答えなければならぬ義務はありますが、私ども自身が法案をつくるわけではありません。

それからソフトとハードの問題ですが、私どもの仕事というものは、いかなる国にも負けない物理的性能を持った電気通信設備を、全国どこへでも要求があれば提供していくというのが第一義的なものです。

現在、電々公社法という事業体を規制する法律と、公衆電気通信法という電気通信設備の使い方を規制した法律の二本立になっています。公衆電気通信法は電報と電話だけしかない、非常に幼稚な時代の法律でして、しかもこれは独占制を極端に主張した形になっており、あまりにも世の中の実状に合わなくなつたので、去年の十月に法改正して一部自由化したわけです。

INSの世の中になってくると、この公衆法を根本的に見直さざるを得なくなります。いまの公衆法にそのまま固執したら迷惑するのはみなさんですから、世の中がそういうものを放つばらかしておいて承知するはずはない。いざ根本的な見直しを必要とする時期がくるだろうと思います。

そのときに、みなさんがマスメディアとしてきちつとしたままとまった意見を出していただくということ、非常に大事な問題になるかと思うのです。電気通信設備を使う際には、こういう使い方であれば販売にならない、ということを見なさんのほうから主張していただく必要があるのではないだろうか。

公衆法に従って世の中が通信設備を使用するわけで

して、それに耐えるだけの物理的性能を提供し保守するのが電々側の仕事です。現在データ通信設備サービスという業務をやっていますが、これは特例的なものです。日本のデータ通信がアメリカに遅れないようにということ、差し当たり電々が全国規模のものをやったままで、私どもはこれを永久的なものだとは思っていません。今後の公衆通信法改正の場合に、この問題は見直される性質のもので、と私どもは考えています。

もし仮に電気通信設備を提供している側が、それを利用してサービスを提供するみなさんと競争して、自由自在にやるということが、果たして世の中のためになるかどうか、これはよほど慎重に考えなくてはならない問題だと思います。いままでデータ通信サービス業務を前述のような意味でやっていたのを、さらに続けていいのかがどうか。これに対してはかなり強い疑問が世の中にはあるはずですから、そのことを申しあげているのが、過去の私の言葉なんでして、私、個人の意見として申しあげているのではないのです。

もし子会社でやるなら尻抜けではないか、と質問の中にもあったのですが、それはいいかえれば、電々がそういうことをやるのはけしからんじやないかということなので、そういうことが世の中のコンセンサスであれば、新しい電気通信の使い方の公衆法に相当するものは、そのへんが根本的に見直されるのではないだろうか。現状を続けることに、私は多分に疑問を持っているということをおしあげているのです。

井出(個人) 全国単一料金というような考えであるとすれば、経営形態を分割とかなんとか複雑にすることと矛盾するのではないか。少なくともいまの話



先月のクラブゲスト



【ポール・シュリ  
ニーター デンマ  
ーク首相記者会見  
二日(火) 司  
会 泉田豊企画委  
員 通訳 米倉淑  
子(サイマル) 出  
席 五七人】



【シリーズ研究会「新技術」(X X) 五日(金) 江崎玲於奈博士(写  
真・上) テーマ 「日本の技術の上げ底」 司会 村野賢哉前企画  
委員 出席 五六人 シリーズ研究会「減税問題」(I) 二五日(木)  
青木茂参院議員(写真下) 司会 有馬真喜子企画委員 出席 四二人】



【シリーズ研究会「世界経済の課題」(I) 三二日(水) 田中章介  
前経企庁海外調査課長(写真・上) テーマ 「米国の景気回復は本物  
か」 司会 平田真巳企画委員 出席 六八人 K・フルクラ  
イス経済相記者会見(写真・下) 司会 江尻進会員 通訳 森由美  
子(サイマル) 出席 三二人】



聞いた限りでは、経営形態を変える必然性というもの  
についての説得力がない。そのへんのところを、素人  
にも分かるやさしい言葉でお話し願えればありがたい  
と思います。

真藤 いまの質問、非常にデリケートなんです。み  
なさんが本当にお分かりになるような説明をするため  
には、現状の私の立場ではかなりいい過ぎたことをい  
わなくてはならないので……(笑)。

単一料金というのは、さっき申しましたように、可  
処分所得の中に入る単一料金ということなのです。い  
まの料金体系を全部総平均しますと、可処分所得の中  
に入りません。三分十円というのが市内料金ですが、  
一時間使っても二〇〇円です。三分十円ということは  
みなさんご存じだけけれど、一時間二〇〇円という概念  
はお持ちになっていない。一時間二〇〇円ならば五〇  
時間使っても一万円です。いまテレビをよく見る家庭  
では、一か月五〇時間くらいつけている。一万円くら  
いなら、そういう使い方をすれば、外に出る機会が減  
りバスや電車に乗る回数が少なくなりますから、可処  
分所得の中に入ると思います。しかし、三分十円、一  
時間二〇〇円で均一料金にしたのではいまの電々は成  
り立ちません。つまり三分十円にしますと、現在の通  
話の状態では、いまの収入は大幅に減ります。仮に一  
時間三〇〇円にしても、五〇時間使ってもらえるなら  
ば一万五、〇〇〇円ですから、これなら何とかなると  
思います。そこへもっていくにしても、通話量がい  
まのままですと、収入は半分になります。  
収入が半分になっても、みなさんに迷惑をかけない  
ような事業体になるのはどうすればよいか。それが  
いままでの日本の公社制度の歴史をふり返ってみて、

出来ることか、出来ないことかということなんです。  
問題は、経営上、収支バランスを取りながら、そこへ  
もっていくのはどうすればいいかということなの  
で、それが出来る経営形態というのはどういう形でし  
ようかということなのです。さきほど申しあげたよう  
に、ここ一〇年以内に、大体その態勢をとらなけれ  
ば、世の中の役に立つINSにはなりません。そんな  
短期間に出来ませうでしょうか。  
(文責 編集部)

● ゴルフの会 ●

第三十八回ゴルフの会は次の要領で開催されま  
す。

日時 十月二十八日(金) 午前九時三十分  
コース 都留カントリークラブ(☎〇五五四四一  
三―五五四一)  
会費 二万円

※新宿駅西口(富士銀行前)とゴルフ場間はク  
ラブバスで送迎。往路は新宿午前七時三十分  
発です。

参加ご希望の方は、十月八日(土)までにクラ  
ブ事務局へお申し込みください。

● 囲碁同好会 ●

九月の例会は二十四日(土)午後一時から、い  
つものようにクラブ大会議室で開催いたします。  
夏の研さん結果をどうぞお試しください。会費  
千円。ウイスキー飲み放題、成績優秀者には賞品  
あり。初めての方歓迎。



# 東京支社訪問

## 山形新聞

相変わらず「おしん」ブームが続いている。

「取材先でも、『ああー、あの『おしん』の山形ねエー』という具合だね」と石川敬義支社編集部長。「おしん」がらみで、山形へ取材に出かけたのだが」といった、他社からの相談も支社へ飛び込む。

台風五号が愛知県へ上陸した八月十七日午後、石川さんと斎藤博支社次長兼営業部長、そして毎日新聞を定年退社し、三月から東京駐在論説委員となった石丸和人さんの三人に話を聞いた。支社は、小笠原胤公支社長（療養中）のもとに十一人、昭和通りに面した第一太陽ビル三階に山形放送、山新観光と同居する。

石川さんは支社活動の特徴を一言で、「山形新聞国際局」という。

「毎年、海外取材団が出るけど、その準備、手続きなど、こまごまとしたことも私たちの役目なんです」

四月の中曽根首相ASEAN訪問には、支社から石丸さんが同行した。豊富な海外特派員経

験を持つ石丸さんだが、ASEAN諸国は初めてだったとか。（クラブ会報六月号に「日米同行取材」を執筆）また、七月にはタイ難民救援金特使団に同行して、再びタイへ。これは「タイ難民に愛の手を」と服部敬雄社長自らが県民に呼びかけて募った五千万円を、プレム・タイ首相に直接届けたものだ。

「社長の意向でもありますが、私たちの仕事は山形県の中だけにとどまりません。今回の救援金運動も、もつと国際的な視野にたつての県民運動ということだ

### 別名は山形新聞

### 「国際局」です

「つたんです」と斎藤さん。七月には、青年海外協力隊員の活動を報道するため、ケニア、ザンビア、スリランカへ取材団が派遣されている。

紙面の目玉は、何ととっても朝刊一面を飾るカラー写真。五十四年暮れから、ニュース写真のカラー掲載を毎日続けている。

東京での県関連の重要な会議、催物の写真は石川さんが撮る。「すぐ共同へ駆け込んで現像し、本社へカラー電送ですよ。色っぱい話を送るよってネ」。

限られた時間内に狙い通りの色を出すのは難しい。だが、斎藤さんが上げた八月十五日付朝刊には、山形花火大会の写真が、七色に夜空を彩るのキャプション通り、鮮かにくつきりと七色。

「毎日のことだから、慣れですね」と謙そんするが、他紙には絶対に負けていないという自負ものぞく。製版や写真技術など、努力の積み重ねが生んだ結果といえる。

「実は、僕、この間感動したんです」と石丸さん。プレム首相と岡崎恭一特使

団長（取締役副社長・主筆）が会談している写真が、パソコンからはるかかなたの山形で、翌日の朝刊を飾った。

会議場からまっしぐらパソコン空港へ放送用ビデオ（山形放送用）と写真ネガがはこばれる。成田では石川さんがそれを待機、白バイを気にしながら超特急で共同へ、現像して写真を選び、そして本社へカラー電送した。

「新聞記者って、待って、待って、その瞬間に、瞬発的な力が発揮できるかどうかだと思っただけ、あの時は感動しましたね」

支社の編集は石川さんと石丸さんの二人。石丸さんは社説、コラムを合わせて月に十二、三本くらい書く。

石川さんは「活躍するトップ——県出身企業人」のインタビュを担当しているが、夕刊コラム「直言」への執筆依頼や県勢懇話会（山形県内で毎月開催）の講師依頼のほか、おしんちゃん役の小林綾子ちゃんが山形へ行くとなれば、関係筋との事務的な連絡にもあたる。このほか、四年前に服部社長の発案で誕生した勸情報社社会学研究所の世話も、石川さんの担当。二人そろって「働きバチ」。

「原稿書きは、全体の仕事量の一割くらいかもしれない。でも山形にいたら会えない人に会えて、直接話が出来るといえるのは得がたい経験……。私は、ホント、肉体労働ばかりで……」と石川さん。

「自分一人でやらなくてはいけないことがすごく多い。何か、日本国内の特派員」といった感じですね」と石丸さん。



右から石川さんと斎藤さん、左奥が石丸さん



# プロフィール

(九月一日付入会の賛助会員です)

宴会、会議室、レストラン

予約は(五〇三)三七六六で!

各会議室の予約、レストランのテーブルリザーブ、料理注文などは、出来るだけ(五〇三)三七六六のクラブ受付直通電話でお願いいたします。なお、この電話は転送が出来ないため、ラウンジにいる会員の呼び出しは従来通り、(五〇三)二七二一でお願いいたします。

また、記者会見、研究会、試写会などの行事予定は、(五〇三)三七六四でお知らせしています。

## 寄贈書

共生の戦略 (1) 読売国際経済懇話会

こちらロンドンBBC (英訳) (2)

THE MEANING OF SURVIVAL サイマル出版会

新聞人 本田親男 中国新聞社

会員の著書 (ご惠贈いただきました)

ペンは剣よりも 坂田二郎

占星術の世界 山内雅夫

ニューメディア用語辞典 山口秀夫

株の兆し 小針寛司

乾坤一擲ノ兆候で儲ける秘作戦

ピジョンボックス ニューメディアの論議

がさかんだが、新聞のようなくオールドメディアとのかかわりがもうひとつピンとこない、というのが実情ではなかったろうか。そこでPR。新聞協会開発部が翻訳、このほど刊行し

たIFRAの「新聞とニューメディア」はまさに格好の参考書(IFRAは国際新聞発行者協会FIEJの付属技術研究団体)。一部二、二〇〇円。新聞協会会計担当(五九二)四四〇一で発売。(新聞協会・桂)

## ゲスト・カード

第10回日米記者交換米国記者団10名

計報 八月十一日午後八時五分、ノースカロライナの海軍病院で、ロバート・グリーン前在日米軍司令部報道連絡事務所長が胃ガンのため逝去いたしました。八月四月に当クラブが実施した「米太平洋軍(ハワイ)の視察」は、同氏の尽力によるものでした。謹しんでご冥福をお祈り申しあげます。

## 九月の行事

20日(火)午後2時~3時30分 シリーズ研究会

『減税問題』(Ⅲ) 石井弘光一橋大学

教授 クラブ記者会見室

21日(水)午後2時~4時 シリーズ研究会『軍

事技術』(Ⅱ) 上原祥雄防衛庁整備局

開発計画官 クラブ記者会見室

## 会報委員長 深谷憲一

委員 桂敬一 井出新六 斎藤吉史 安延久夫  
連絡 長谷川 河野(事務局) 五〇三一二七二二